

## キェルケゴールにおける自然の教育学的考察

伊藤潔志

### 1. 自然と教育

本稿は、S・A・キェルケゴール(Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855)<sup>\*1</sup>の自己生成論の構造を明らかにし、その教育学的意義を探ることを目的とする。教育は存在(Sein)と生成(Werden)の両面から捉えることが出来るが、生成の面から捉えた教育は「教育作用」と呼ばれ<sup>\*2</sup>、人間を人間たらしめる生成に働きかける作用である。したがって、その在り方を求めるには、人間の生成に関する探求が不可欠であろう。ただし、言うまでもなく教育作用は、無目的なものではなく有目的なものである。ここで、キェルケゴールが言う自己生成が無目的な生成ではなく有目的なものであることに注意しておこう<sup>\*3</sup>。ここにキェルケゴールの自己生成論を教育学的に考察する意義の一つがあると思われるからである。

キェルケゴールの自己生成論を論じるにあたり、本稿ではキェルケゴールの自然理解を手がかりとしたい。しかし、キェルケゴールの自然理解を取り上げることについては、訝しがれる向きもあるかもしれない。たしかに、キェルケゴールの自然理解について取り上げられることは少なく<sup>\*4</sup>、自己生成論

<sup>\*1</sup> 本稿でキェルケゴールの著作は *Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, Gyldendal, København, 1962-1964. (『全集第三版』、略号 SK3) を使用し、引用は略号の後に巻数と頁数を示した。日誌・遺稿は *Søren Kierkegaards Papirer*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, 2, udg. ved Niels Thulstrup, København, 1968-1978. (『日誌・遺稿集第二版』、略号 Pap.) を使用し、引用は略号の後に巻数と整理番号とを示した。邦訳は、大谷長監修『原典訳記念版キェルケゴール著作全集』創言社、1988年～によった。

<sup>\*2</sup> 西村皓『人間観と教育——教育学的人間学への寄与——』世界書院、1967年、1頁参照。なお西村は、存在から捉えた教育については「教育形態」と呼んでいる。

<sup>\*3</sup> 拙稿「キェルケゴールにおける絶望の教育学的考察」(キェルケゴール協会『新キェルケゴール研究』第3号、2004年7月、142～158頁所収) 157～158頁参照。

<sup>\*4</sup> 管見に入る限りでは、川村永子『キェルケゴールの研究——新しい宗教哲学的探求——』

は歴史（または自由・時間）などとの関わりで論じられることが多い。しかし、歴史の側からの生成理解だけでは、生成の一面しか捉えられないのではないだろうか。けだし、自然という観点からキェルケゴールの自己生成論を捉え直すことは、キェルケゴールの人間理解の豊穡さをさらに引き出すことになるだろう。

ここで、上のような関心からキェルケゴールを論じるにあたり、自然と歴史との関係、人間と自然・歴史との関係について簡単にまとめておきたい。というのも、一般にその語義は多様だからである。まず、自然と歴史との関係ついてだが、ここでは自然の語義を三つに分けて、歴史との関係を整理しておきたい。自然は、第一に「人為」「文化」に対立する語として、第二に「奇跡」に対立する語として、第三に「稀」「異常」と対立する語として用いられる。第一の意味での自然には、人為の連関や文化の変遷としての歴史が対置される。第二の意味での自然には、ユダヤ＝キリスト教的終末論に見られるような救済史としての歴史が対置される。第三の意味での自然では、現代宇宙論や進化論に代表される自然科学よってすべての出来事は説明されうるとする限りで、歴史は自然の内に解消される。このように、自然をどう捉えるかによって、歴史の意味も変わってくる。

次に、人間と自然・歴史との関係についてだが、自然を人間と関係ないものとして捉えるならば、人間が存在するところには自然は存在しないということになる。しかし人間自身、自然的存在であることは言うまでもない\*5。また、歴史を過去のものとしてのみ捉えるならば、歴史は現在のどこにも存在しないことになる。しかし人間は、歴史の中で行為しつつ生きている、歴史的存在であることもまた事実である。したがって人間は、自然的存在であると同時に歴史的存在でもある。実際に人間は、自然的存在でありながら、

---

近代文藝社、1993年、中里巧『キェルケゴールとその思想風土』創文社、1994年、橋本淳「人間と自然——キェルケゴールにおける自然観——」（関西学院大学神学研究会『神学研究』第51号、2004年3月、97～106頁所収）がある。

\*5 河合雅雄は、進化史を通じて人類の存在の根本を形成している諸性質を「内なる自然」と呼んでいる（河合雅雄『子どもと自然』岩波新書、1990年、20頁参照）。

理性によって自然に関係することにより、歴史を創り出してきた。

かくして、自然の側から人間の生成を考察していこうとするのだが、これが教育についてどのような意義をもたらすのか。次に、この点を明らかにしておきたい。周知のようにT・ホッブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）は、自然状態は闘争状態であるとし、人間の本性は闘争的であるという人間観を示している。それに対してJ・ロック（John Locke, 1632-1704）は、自然状態は平和な状態であるとし、人間の本性は平和的であるという人間観を示している。このように、人間観は自然観によって規定される。自然観が人間観に影響を与えるならば、教育観にも影響を与えるだろうことは想像に難くない。たとえばJ・J・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）は、文明はすべての悪の根源で、自然状態こそが理想状態であるとして、素朴で無垢な人間観を示している\*<sup>6</sup>。この人間観は、「万物を作る者の手を離れるときはすべてはよいものであるが、人の手に移るとすべては悪くなる」\*<sup>7</sup>という言葉に集約される。このような人間観に基づきルソーは、教育には自然による教育、人間による教育、事物による教育の三種類があるとした上で、自然による教育に他の二種類の教育を一致させるべきであるとした\*<sup>8</sup>。自然による教育とは、子どもを社会の害悪から守る教育であり、子どもに対して注入や強制をしない教育であり、子どもの発達段階に合わせた教育である。要するに、消極教育と呼ばれる教育である\*<sup>9</sup>。

このように、自然をどう捉えるは、人間さらには教育をどう捉えるかに繋

\*<sup>6</sup> ルソー（本田喜代治・平岡昇訳）『人間不平等起原論』岩波文庫、1933年、83頁参照。

\*<sup>7</sup> ルソー（樋口謙一訳）『エミール』ルソー選集8、白水社、1986年、10頁。

\*<sup>8</sup> ルソー、前掲書、11～12頁参照。

\*<sup>9</sup> このような合自然の教育を説く教育思想は、一般に自然主義と呼ばれる。自然主義の教育思想は、ルソーに先立って、J・A・コメニウス（Johann Amos Comenius, 1592-1670）によって示されている。コメニウスは、教授学（教育方法論）の原則は万物の秩序をなす自然法則から導き出されるとしている。このような外的自然に従う教育を説く教育思想を客観的自然主義と呼ばれる。それに対して、ルソーのような子どもの内的自然に従う教育を説く教育思想は、主観的自然主義と呼ばれ、J・H・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）やF・W・A・フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）などに受け継がれていった。

がってくる。このことは、細谷恒夫の議論においてさらに鮮明になる。細谷は、「自然が依然として人間の生活環境の基底をなしていることは否定できない。というのは文化の持つ歴史的社会的条件それ自身も、結局は自然を基底としてその上立って初めて可能であるからである」\*10とした上で、自然を即自的な (an sich) 自然、対自的な (für sich) 自然、即且対自的な (an und für sich) 自然の三つの段階に分け、それぞれの人間形成力について次のように述べている\*11。即自的な自然においては、人間は自然の一部であり、自然法則の支配・影響を受けるという意味で、自然は人間を形成する。対自的な自然においては、人間は自然に適応し、自然を支配しようとするを通じて、人間は形成する。即且対自的な自然においては、人間は自然に即時的に支配され対自的に自然を利用するが、このこと自体が主体として自覚され、自己意識の中に取り込まれた自然が人間を形成する。

それでは、自然をどのように捉えるべきなのか。そしてそのとき、生成はどのようなものとして現れ、どのような意義を持つのか。以下では、キェルケゴールの基本的な自然理解の特質と、自然と実存との関係とを明らかにする (2・3)。そして、キェルケゴールの自然理解の独自性と生成の構造と自己生成論の教育学的意義を提示したい (4)。

## 2. 自然の認識

前節でも述べたように、これまでキェルケゴールの自然理解が取り上げられることは少なかった。しかし、決してキェルケゴールが自然に無関心だったというわけではない。本節と次節とから明らかになるように、キェルケゴールはむしろ自然をこよなく愛していたと言える。ただし、キェルケゴールが生きていた当時のコペンハーゲンには、城壁に囲まれた要塞都市であり、

\*10 細谷恒夫『教育の哲学——人間形成の基礎理論——』創文社、1962年、87頁。

\*11 細谷、前掲書、88～89頁参照。

必ずしも自然に恵まれていたわけではない<sup>\*12</sup>。その意味でキェルケゴールは都会人であり、真に自然を経験するには1835年6月～8月のギーレライエ (Gilleleje) 旅行を待たなければならない。

また、キェルケゴールが自然科学に無関心だったという印象も誤りである。自然科学に対して批判的・否定的になっていくのは事実だが、それも自然科学に大いに関心があったからこそである。事実、コペンハーゲン大学に入学した最初の試験では自然科学に関する科目で優れた成績を修めているし、自然科学研究に熱中した時期もあったらしい<sup>\*13</sup>。キェルケゴールが自然科学に関心を持つようになったのは、義兄の植物学者P・V・ルン (Peter Vilhelm Lund, 1881-1880)<sup>\*14</sup>によるところが大きい。

本節では、キェルケゴールが自然科学をどのように評価していたのかを通して、キェルケゴールの自然理解の特質を探っていくことにする。

### (1) 自然科学

キェルケゴールの自然科学に対する評価は、ギーレライエ旅行の直前の1835年6月1日付でルンに宛てた手紙に、最初の手がかりがある。

自然科学者は、多くの個々の事象について知っていますし、多くの新しいことを発見しますが、それだけで、それより先には進みません…… [中略] ……しかし、思弁 (Speculation) を用いて、通常の世界 (Verden) のどこにも存在しないあのアルキメデスの一点を見出したり、見出そうと努めたりし、そうした観点から全体を考察して、個々の事象を正しい光の内に見る自然科学者は違います。そうした自然科学者は、私に最高に新鮮な印象を与えます。(Pap., I, A72.)

<sup>\*12</sup> 19世紀前半のデンマークの風土については、高藤直樹『キェルケゴール思想へのいざない』ビネバル出版、1996年、23～60頁を参照のこと。

<sup>\*13</sup> 橋本淳『逍遙する哲学者——キェルケゴール紀行』新教出版社、1979年、55～56頁参照。

<sup>\*14</sup> ルンについては、橋本、前掲書、56～57頁、中里巧、前掲書、67頁を参照のこと。

ここでは、自然科学批判とまではいかないまでも、キェルケゴールが自然科学に限界を見出していることはわかる。逆に言うと、限界を超えない範囲であれば、自然科学は好ましいものだということにもなる。しかしキェルケゴールは、次のようにも言っている。

たしかに私は、自然科学に魅せられてきましたし、今でもそうです。けれども私は、自然科学を私の主要な研究にしようとは思いません。理性 (Fornuft) と自由 (Frihed) とによる人生 (Livet)こそが常に私の最大の関心事で、そうした人生の謎を解き明かすことこそが絶えず私の願いだからです。……〔中略〕……自然の中には、科学の秘密を洞察するのは別の仕方では観察されるべき一面があります。……〔中略〕……だから私は、一つの花の中に全世界を見るときか、人間の生活について自然が教えるさまざまな目配せに耳を澄ますなど……〔中略〕……します。(Pap., I, A72.)

ここで、キェルケゴールにとって自然科学は、一時の熱中にもかかわらず、自分が打ち込むべき研究の対象ではなくなっていることがわかる。このような理解をもってキェルケゴールは、ギーレイエへと旅立ち、豊かな自然を体験していったのである。しかし上で見たように、自然を支配しようとする自然科学に対しては、すでに消極的である\*15。この自然科学に対する評価は、ギーレイエ旅行の後、否定的なものへと変わっていき、自然科学批判が強まっていくことになる。

上述のように、キェルケゴールが自然科学に見出したのは、その限界である。ここで、自然科学の限界は二つに分けることが出来る。それは第一に、自然科学の知識は蓋然的なものでしかない、という限界である。たとえば、キェルケゴールは次のように言っている。「その全体は接近である。およそ、およそであって、……〔中略〕……多くの書物で扱われ、そのために

\*15 キェルケゴールのギーレイエ日誌に沿ってその地を辿ってみると、自然についての描写は豊富だが、人工物に対しての記述がほとんどないことがわかるという(橋本、前掲論文、102頁参照)。

顕微鏡が用いられる」(Pap., VII<sup>1</sup>, A186.)。第二に、自然科学の認識は一定の真理性を持つてはいるが、それは科学の領域の範囲内でのことではない、という限界である。精神の領域には、科学による量的・客観的な認識とは異質の、質的で主体的な認識が必要である。自然科学は、倫理的なものとは「まったく異質なもの」(Pap., VII<sup>1</sup>, A183.)である。それゆえ、自然科学者が自分自身を理解せず、精神の領域にまで踏み込むとき、「自然科学は危険である」(Pap., VII<sup>1</sup>, A182.)と指摘する。自然科学に基づく知識を絶対視し、人間を神にまで導こうとするなら、それは欺瞞ですらある。それゆえ、キェルケゴールは言う。

このような科学が精神の領域へと踏みこもうとするとき、危険であり破滅となる。それらには、それなりの仕方では植物・動物・星を扱わせるのがよい。しかし、人間精神をその仕方では扱うことは、倫理的なものや宗教的なものの情熱を弱めるだけの、冒瀆である。(Pap., VII<sup>1</sup>, A182.)

自然科学が人を神に導くと言われる事柄が偽善である。たしかに自然科学は——高貴な仕方では神へと導く。しかしこれは、僭越である。(Pap., VIII<sup>1</sup>, A186.)

そしてキェルケゴールは、こう皮肉る。「もし、キリストが顕微鏡のことを知ったなら、まず使徒たちの観察にそれを充てるだろう」(Pap., VII<sup>1</sup>, A197.)。かくして、自然科学は「あらゆるものの中で最高の思い上がり」(Pap., X<sup>5</sup>, A73.)であり、「神に対する反抗」(Pap., X<sup>5</sup>, A73.)だとされる。ついに、「神を余計なものとし、自然法則をそれに置き換え、……〔中略〕……人間が神となる」(Pap., X<sup>5</sup>, A73.)。すなわちそれは、「自然科学が宗教となる」(Pap., X<sup>5</sup>, A73.)ということである。

上述のように、自然科学があるべき領域にとどまっている間は、キェルケゴールに異存はない。しかし、自然科学を絶対視し、精神の領域にまで進出させるとき、自然科学は新しい神すなわち異教となり、神に対する反抗とな

る。キェルケゴールは、1846年の日誌で次のように言っている。「あらゆる破滅は、最終的には自然科学からやってくる」(*Pap.*, VII<sup>1</sup>, A186.)。これは、キェルケゴールの予言ではあるまいか。

## (2) 内的直観

(1) で見たように、キェルケゴールは自然科学に対して批判的であった。その批判の根本は、自然科学がその分をわきまえていない、ということに尽きる。換言すると、自然科学ですべてのことが認識出来るわけではない、ということである。それはとりわけ、精神の領域において強調されていた。それではキェルケゴールは、自然認識についてどう考えていたのであろうか。たとえば、自然科学は自然を対象としてそれを十分認識することが出来る、とでも考えていたのであろうか。ここでは、キェルケゴールにおける自然認識の在り方を見定めていきたい。

まず、キェルケゴールにおいて自然が初めて登場してくる、ギーレライエ旅行の前年の1834年9月11日の日誌から見てみよう。「自然の美しさを詠うとき、天才詩人たちは肉体の外面的な眼を用いて見ていたのではない……〔中略〕……彼らが見ていたものは、内的直観(en indre Intuition)によってたち現れていた……〔後略〕……」(*Pap.*, I, A8.)。ここでキェルケゴールは、自然を認識するのは「外面的な眼」ではなく「内的直観」だとしている。そして自然認識とは、「内的直観」によって認識した自然の本質を外的表象に還元し、その外的表象を再構成することだと言う(cf., *Pap.*, I, A8.)。キェルケゴールは、「内的直観」で自然のあるがままの姿を直観し、これを受けとめようとする。先のキェルケゴールの自然科学批判も、基本的にはこのような理解の上にあったと考えていいだろう。

ところで先に見たように、キェルケゴールの自然科学批判は、ギーレライエ旅行後に大きく強化されていった。その原因としては当然、キェルケゴールの思想の深まりが考えられるだろうが、その中でも特に自然理解の深まり



に注目したい\*16。先述のようにキェルケゴールは、ギーレイエで初めて真の自然を体験したと言ってよく、キェルケゴールの自然理解に大きく影響を与えたはずであり、キェルケゴールの自然科学批判の強化の要因の一つもそこに見出せると思われるからである。ギーレイエ日誌には自然描写に関する記述も多く、キェルケゴールが自然に大いに関心を寄せていたことがわかる (cf., *Pap.*, I, A63-66.)。ここで興味を惹くのは、1835年7月29日の日誌である。そこでは、キェルケゴールがギーレイエの北にあるギルベア (Gilbjerg) を訪れ、そこにある断崖から海を見下ろしたときの幻想的な風景が記されている\*17。キェルケゴールは、そこで自然と一体化し、死んだ家族の霊と会い、その霊と一体化するという体験をしている\*18。この神秘的な体験から、キェルケゴールは何を得たのだろうか。

このように私が一人で立ち、いつまでも立ち続けたとき、そして海の威力と大自然の力のいどみとが、私に自分が虚無に等しいものであることを想起させたとき、そして他方で、何の憂いもなく空を飛ぶ小鳥たちが「あなた方の父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない」(「マタイによる福音書」第10章第29節)というキリストの言葉を想起させたとき、まさにそのとき、私はどんなに偉大であると同時にどんなに取るに足らないものであるかを感じ、まさにそのと

\*16 なお中里は、自然科学の発展にもその原因を求めている (中里、前掲書、109頁参照のこと)。

\*17 「この地点〔ギルベア〕は、相変わらず私の好きな場所の一つである。ある静かな夕べ、そこに一人立ったとき、海は奥深くしかし静かな厳肅さの内に己が調べを奏でていた。その大海には一隻の船の姿も見えず、海と大空とが互いに接しているのが遠くに見えた。また、昼間の生活の煩わしい喧騒は静まり、小鳥たちは夕べの祈りを歌っていた——」(*Pap.*, I, A68.)。

\*18 「そのとき私の眼前に、いくどとなく墓の中から、今は亡き何人かの愛する〔家族の〕者たちが姿を現してきた。いや、もっと正しく言うなら、私には彼らが死んでいないかのようにであった。私は、彼らを取り巻く真ん中に立っているのをはっきりと感じ、彼ら抱きかかえられていた。私はあたかも、自分の肉体から抜け出して、より高いエーテル(霊)の中を彼らとともに浮遊しているようであった。……〔中略〕……私の心は、今のような祝福された瞬間をどうしても忘れることが出来ず、あの亡き人々の世界の住人の一員に加えられることを、ひたすら請い願うのみだった」(*Pap.*, I, A68.)。

き、あの二つの偉大な力すなわち誇りと謙虚さとが、親しく手を握り合ったのである。その人の人生のあらゆる瞬間でそのようなことが可能である人は、幸いである。(Pap., I, A68.)

このようにキェルケゴールは、自然との一体化を体験し、その中で自分が偉大である同時に虚無に等しいものであることを知る。ここでは、偉大さと虚無さ、誇りと謙虚さとが融合している。キェルケゴールは、この二つが融合する「アルキメデスの一点」を求める。キェルケゴールは、この二つの融合のためには、真の謙虚さが学ばなければならないとする。そして、キェルケゴールは言う。

そのような〔真の〕謙虚さを学ぶために……〔中略〕……、人がこの世の喧騒から身を引くことはよいことである。……〔中略〕……自然のただ中において、……〔中略〕……魂は、あらゆる高貴な印象に対して喜んで自己の扉を開くのだ。ここで人間は、自然の主人としてその奥に座を占めているが、彼はまた自然の中には、より高いものすなわち彼がそれに対して跪拝しなければならないものが姿を現しているということも感じるのである。すなわち彼は、自然全体を支配する力に自分を委ねる必然性を感じるのである。(Pap., I, A68.)

このように、自然を対象として捉えるのではなく、自然の中に入っていく、自然に向かって自分から語りかけていく。そこから自然が語り返してくる囁きを、心を開いて素直に、心の奥深くで聴き取ろうとする。このように自然を見ることが、キェルケゴールの言う自然に対する内的直観であり、それによって偉大であり虚無でもある自己の姿を捉えることが出来る。キェルケゴールの内的直観に関する思惟は、ギーレライエにおいて実際に体験されることによって深まり、自己の在り方にまで迫っている。(1) で見たように、キェルケゴールは科学の領域と精神の領域との峻別を強く求めていたが、ここでは精神の領域の拡張が図られていると言える。それゆえ、キェルケゴールの自然科学批判は熾烈になっていったのだと考えられる。

### 3. 自然と人間

前節では、キェルケゴールの自然科学批判を軸に、キェルケゴールの自然理解を見てきた。本節では、自然と人間との関係から、キェルケゴールの自然理解の特質を明らかにしていきたい。以下では、自然と人間との関係が論じられている後期の実名著作『野の百合と空の鳥 (*Lilien paa Marken og Fuglen under Himlen*)』(1849年)を中心に、キェルケゴールの自然理解を明らかにしていく。

#### (1) 『野の百合と空の鳥』第二部

『野の百合と空の鳥』は二部構成になっており、いずれも『新約聖書』の「マタイによる福音書」に収録されているイエスの「山上の垂訓」と呼ばれる教えに従って、野の百合と空の鳥とを教師として受け取り、それに人生を学ぼうとしたものである。このうち第二部は、『さまざまな精神における建徳的講話 (*Opbyggelige Taler i forskjellig Aand*)』(1847年)で既に発表されていたものである。ここでは著作年次に従い、第二部から見ていくことにする。

第二部は三つの講話からなっている\*<sup>19</sup>。第一の講話は、「人間であることに満足すること」(*SK3, 11, S. 149.*)を主題とする。ここでキェルケゴールは、「野の百合を思え」(*SK3, 11, S. 149.*)、「空の鳥を見よ」(*SK3, 11, S. 158.*)と言う。それは、野の百合も空の鳥も、思い煩うことがないからである。そして、「すべての世俗的な思い煩いは、人間が人間であるということに満足

\*<sup>19</sup> 日誌に「百合と鳥についての三つの講話における設計図は、最初の講話は審美的、次のものは倫理的、三番目のものは宗教的、といったようなものである」(*Pap., VIII, A1.*)とあるように、これらの講話にはそれぞれ、審美的設計図、倫理的設計図、宗教的設計図が与えられている。したがって、伝達方法という観点からも興味深い。ここではおいておく。この点については、G・マランチュク(大谷長訳)『キェルケゴールの弁証法と実存』東方出版、1984年、344頁を参照のこと。

しないということに、また比較によって思い煩わされた欲求が差異に至るといふことに、その根拠を持っている」(SK3, 11, S. 154-156.) と言う。つまり思い煩いは、他人との比較によって生じるものである。人間は、野の百合と空の鳥とを見て、思い煩わないようにしなければいけない、人間であることに満足しなければいけないのだと言う。このとき、野の百合と山の鳥とは、人間の「教師」(SK3, 11, S. 167.) である。

第二の講話は、「人間であるということは何とすばらしいことであるか」(SK3, 11, S. 172.) を主題とする。キェルケゴールは「マタイによる福音書」第6章第30節の聖句を取り上げ<sup>\*20</sup>、この聖句は神の穏やかな叱責だと言う。たしかに百合は美しいが、神には似ていない。それに対して人間は、神に似せて造られている。これは「あらゆる被造物に対する優位」(SK3, 11, S. 177.) であり、「神との類似性」(SK3, 11, S. 177.) である。人間は、百合によって思い煩いを晴らされ、人間が美しいものであることに気づく。それゆえ、百合は人間の教師である。しかしそれは同時に、人間は百合よりもすばらしいものだということでもある。

それでは、鳥からは何を学ぶのか。鳥は、働かないのにもかかわらず、暮らしの心配(思い煩い)をすることがない。それは、瞬間の中を生きていて、永遠的なものを持たないからである。暮らしの心配をするため人間は働くが、「働くということは人間の完全性である。働くことによって人間は神に似るのである」(SK3, 11, S. 182.)。思い煩う者は、鳥を見ることによって、働くことがいかにすばしいか、人間がいかにすばしいかを学ぶ。それゆえ、鳥は人間の「教師」(SK3, 11, S. 180.) であると言えるが、働くがゆえに人間の方がすばらしいのである。

第三の講話は、「人間であるということにどのような浄福(Salighed)が約束されているか」(SK3, 11, S. 186.) を主題とする。キェルケゴールは、「マ

<sup>\*20</sup> 「今日は生えていて、明日は妬に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄いものたちよ」(「マタイによる福音書」第6章第30節)。なお邦訳は、共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳』日本聖書協会、1987年によった。

タイによる福音書」第6章第30節<sup>\*21</sup>、第10章第29節<sup>\*22</sup>、「ヤコブの手紙」第1章第11節<sup>\*23</sup>を引き合いに出し、自然の中には美しさとともに底知れぬ悲哀があると言う (cf., SK3, 11, S. 185.)。しかし、人間はそれに気づかず、気づかないところに人間の悲哀がある。それゆえ、百合の装いや鳥が空を飛ぶことを羨んではいけない。ここでキェルケゴールは、「マタイによる福音書」第6章第24節<sup>\*24</sup>を引き合いに出す。自然は神と富という二人の主人に仕えないし、したがって百合や鳥も二人の主人には仕えない。それは、自由がなく、必然性に縛られ、選択することが出来ないからである。しかし、人間には選択する自由がある。また、神は人間が選択することが出来るように造った以上、人間は選択しなければならない。「正しく選択する者に対して、何という浄福が約束されていることだろう」(SK3, 11, S. 188.)。人間が百合や鳥のように思い煩わなくなったとき、人間は富という主人には仕えないのである。

キェルケゴールにおいて、百合と鳥とは自然を示していると考えてよい。したがって、第一の講話では思い煩いを晴らしてくれる「教師」としての自然が、第二の講話では人間のすばらしさを教えてくれる「反面教師」としての自然が描かれていると言える。その上で、第三の講話では、人間は自然には生きられず<sup>\*25</sup>、信仰に生きなければならないことが説かれている。そし

\*21 「今日は生えていて、明日は妒に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる」(「マタイによる福音書」第6章第30節)。

\*22 「日が昇り熱風が吹きつけると、草は枯れ、花は散り、その美しさは失せてしまいます」(「マタイによる福音書」第10章第29節)。

\*23 「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか」(「ヤコブの手紙」第1章第11節)。

\*24 「誰も、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(「マタイによる福音書」第6章第24節)。

\*25 『哲学的断片 あるいは一断片の哲学 (Philosophiske Smuler eller En Smule Philosophi)』(1844年)においても、次のように言われている。「空の鳥のように生きようとするのは、たしかに美しいかもしれないが、それは許されないことである。もし、それに固執すれば、餓死するか、さもなければ他人の財産で食っていくような、最も悩むべき結果になってしまう」(SK3, 6, S. 45.)。

て、自然と人間との違いとして、選択出来る自由が挙げられている点に注意しておこう。

## (2) 『野の百合と空の鳥』 第一部

続いて、『野の百合と空の鳥』第一部を見ていこう。第一部は、三つの講話からなっている。冒頭の「祈り」では、「人間であるということがどういうことか、そして人間であるということの要件が敬虔な意味でどういうことか」(SK3, 14, S. 129.) に対する答えとして、沈黙 (Tavshed)・服従 (Lydigthed)・歓喜 (Glæde) が挙げられている。第二部では百合や鳥に対する人間の優性が強調されていたが、第一部ではその点に反省が加えられる。

第一の講話は、沈黙を学ぶことが主題となっている。百合と鳥とは、人間に沈黙を教えてくれる。人間の本質は話すことにあるが、話すことを止めることによって、神の語りを聞くことが出来るようになる。話すという人間の本質を止める沈黙は、自分自身を無にすることであり、神の前で無になることである。沈黙によって、神をおそれることが始まる。話すことは、動物に対する人間の優越性であるが、神関係においては墮落の原因となりやすい。人間は、おそれとおののきにおいてのみ、神と話すことが出来る。正しく祈る者は、このことを知っている。キェルケゴールは言う。

祈るということは自分自身が話すのを聞くということではなくて、沈黙するに至るということ、そして、祈る者が神を聞くまで沈黙し続け、待つ、ということである。(SK3, 14, S. 136.)

この沈黙は、神に対する畏怖であり、自然の中でそうありえるように、礼拝であるがゆえにこそ、そのゆえにこの沈黙はかくも荘厳なのである。そして、この沈黙はこのように荘厳であるがゆえに、そのゆえに人は自然のうちに神を認めるのである。(SK3, 14, S. 140-140.)

神へのおそれとおののきは、人間の言動を沈黙の中におく。正しく祈る者はそのことを知っており、こうして祈りは沈黙に帰着し、さらに傾聴へと深

められる。祈りは沈黙の瞬間である。沈黙とは、ただ単に話さずに黙ることではない。黙っていても心の中で饒舌であっては、沈黙とは言えない。沈黙をするとは、自分を無化することによって、自己自身となること、そして自己を取り戻すことである。キェルケゴールは、百合や鳥の姿は、この沈黙の姿を我々に教えると言う。どんなときも百合や鳥は沈黙している。そして人間は、この沈黙を百合と鳥とから学ぶことが出来る。それはすなわち、「君が野外の百合と鳥との下で、君が神の前にあるということである」(SK3, 14, S. 141.)。

第二の講話では、服従を学ぶことが主題となっている。百合と鳥との下にある沈黙には、「あれか—これか (Enten-Eller)」が存在している。この「あれか—これか」は、「神を愛するか、それとも神を憎むか」(SK3, 14, S. 145-146.) という、徹底的な二者択一である。キェルケゴールは言う。「神は自らが選択の対象であることによって、選択の決断を緊張せしめて選択が真実にあれか—これかにならしめるものは元々神であるということになるのである」(SK3, 14, S. 145.)。それでは神は、この二者択一で何を求めているのか。それは、「無条件の服従」(SK3, 14, S. 147.) である。そして、これを教師としての百合と鳥とから学ぶことが出来るのだと言う。キェルケゴールは言う。

君の周囲の自然に注意しなさい。自然においては、すべては服従であり、絶対的な服従である。(SK3, 14, S. 148.)

百合と鳥とは神に対して絶対的に服従し、彼らは服従においてかくも素朴、あるいはかくも崇高であるので、彼らが信ずるところは、生起するすべてのものは絶対的に神の意志であり、また、絶対的に服従して神の意志をなすか、あるいは、絶対的に服従して神の意志を堪え忍ぶより以外の何事も世においてまったくなすことはないのである。(SK3, 14, S. 150.)

沈黙は神への服従の第一条件であり、自然においてはすべてが服従であ

る。自然においては、神の意志が直ちになるのである。人間も、必然性から徳を作り出さなければならない。沈黙し投げ委ねることによって、神の意志がなる。百合と鳥とは、「どうすることも出来ない自分自身と現実」を自ら引き受けることを、その沈黙の姿の内に教えている。

第三の講話では、歓喜を学ぶことが主題となっている。歓喜を教える教師は、自分自身が歓喜する者でなければならないが、百合と鳥とは常に歓喜が存在している (cf., SK3, 14, S. 158.)。百合は美しく花を咲かせることで、鳥はさえずることで、絶対的無条件に歓喜する。それは、明日に対する思い煩いがないからである。沈黙と服従を守る百合と鳥とは、今日が存在するだけで明日は存在しない。明日という不幸な日は、饒舌と不服従とを見出させる。歓喜は、真に自己自身に対して現在のときを訪れる。キェルケゴールは言う。

それは、自分自身に真実に現在しているということである。しかし、自分自身に真実に現在しているということ、それはこの「今日」である、今日存在するという、真に今日存在するというのである。……〔中略〕……歓喜とは現在する時間に強調のすべてをおいた現在する時間である。(SK3, 14, S. 160.)

現在の時間を実感するとき、歓喜が満たされる。歓喜は、現在の時間において現れるのであり、沈黙と服従の中で、今日存在するという中で現れる。もちろん、自然全体が悲哀を持っているように、百合も鳥も悲哀を持っているが、それらを神に投げ委ねることによって、無条件に歓喜している。この投げ委ねることを、キェルケゴールは「集中」(SK3, 14, S. 164.)と呼んでいる。百合と鳥とに学び、悲哀を神に投げ委ねるなら、歓喜を持つことが出来る。



#### 4. 自然と生成

以上のように見てきたキェルケゴールの自然理解は、いかなる特徴を持っているのか。人間は、自然の一部であると同時に、精神でもある。2 で見たキェルケゴールの自然科学批判の根底には、精神である人間が他の生物や物と同列に扱われ、人間とそれらの質的差異が看過されることへの危機感があると言ってよい (cf., *Pap.*, VII<sup>1</sup>, A185.)。すなわち、人間と動植物などとの峻別が主張されている。また、人間の内的直観による自然を理解しようとする考えは、キェルケゴールが有機体的自然観を採っていることを示している<sup>\*26</sup>。

自然と歴史との総合として人間を見ていこうとするならば、自然と歴史とを措定する第三者としての神の位置づけが重要になる。そのさい重要になるのは、自然における神の問題である。キェルケゴールにおいて神は、『哲学的断片のための非学問的あとがき (*Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler*)』(1846年、以下『あとがき』と略記する)に「私は神を見出すために自然を観照する」(SK3, 9, S. 170.)とあるように、自然の中に顕現すると見てよい。『あとがき』は中期の仮名著作であるが、これは後期の実名著作においても変わらない。『愛の業 (*Kjerlighedens Gjerninger*)』(1847年)の第二部では、次のように言われている。「しばらく自然を観察してみよう。自然もしくは自然の内なる神は、生命と存在とを持つさまざまなものすべてを、何という無限の愛で包んでくれていることか!」(SK3, 12, S. 259.)。したがって、有機体的自然観を採るキェルケゴールにあつては、自然の中に顕現する神が考えられていたと言える<sup>\*27</sup>。

3 で取り上げた『野の百合と空の鳥』と同年に出版された『死に至る病 (*Sygdommen til Døden*)』(1849年)において、キェルケゴールは人間たる自

<sup>\*26</sup> 中里、前掲書、98頁参照。

<sup>\*27</sup> 中里によると、それは前期から後期まで一貫している。詳しくは、中里、前掲書を参照のこと。

己 (Selv) を関係 (Forholdet) として捉えている (cf., SK3, 15, S. 73.)。自己を関係とみなす考え方は、『野の百合と空の鳥』の中では、「集中」と表現される。すなわち、思い煩いを神に投げ委ね自己に集中していくとき、自己は関係として捉えられるのである。そして、その自己関係は自己生成の過程そのものであり\*28、時間的なものと永遠的なもの、自由と必然との総合である\*29。したがって、人間と自然との関係においては、人間が内的直観によって自然に顕現する神を捉え、思い煩いを神に投げ委ねることによって、自己に集中していく。そこで自己は神によって指定された関係として捉えられ、自己生成していくのである。

このように自然の側からキェルケゴールの自己生成論を見た場合、キェルケゴールの自然理解はどのような教育学的意義を持つだろうか。キェルケゴールは、『キリスト教講話 (Christelige Taler)』(1848年)の第四部で次のように言っている。

自然の中で神の広大性がそれと知られるしるしは、誰でも驚嘆しながら見ることが出来ます。……〔中略〕……自然の中にある神の広大性は明白です。しかし、慈悲深さの中にある神の広大性は信じるべき秘儀です。……〔中略〕……自然の中にある神の広大性は、それをみる人にすぐ驚嘆の念を、そしてさらに崇拜の念を与えます。慈悲深さの中にある神の広大性はまず躓きとなり、それから信仰の対象になります。(SK3, 13, S. 273-274.)

3で見たように自然は自己が生成するための教師であるが、この引用からは、自己生成の契機でもあることがわかる。

現在の学校教育においては、「総合的な学習の時間」の内容として「環境」が例示されているなど、環境教育が奨励されている。その一方で、宗教を扱うことについては、法的な問題もあって消極的である。しかし、「生命に対

---

\*28 前掲拙稿、149頁参照。

\*29 前掲拙稿、146頁参照。

する畏敬の念」といった宗教的な概念は、道徳教育に盛り込まれている。自然の中に人間の力を超えたものを見出し、それを契機に自己生成するという自己生成観は、現行の教育課程においても有効である。キェルケゴールの自己生成論はそのモデルになりうるだろう。

(いとう きよし・東北大学)